

乳幼児が言葉をもつことの意味に関する一考察

—保育所での長年の勤務経験を通して考えてきたこと—

A Study on Meaning of Having Words for Infants

—Through Long-term Work Experience at Nursery School—

前田 綾子

Ayako MAEDA

要旨 (Abstract)

人間しかもたない「言葉」という能力は、言葉を獲得するまでの過程において、大きく影響を受ける。生まれた時から始まる言葉かけや、愛情のある応答的な関わりを基に、大人との愛着関係を築くことから始まる。愛着関係が築けなければ伝わる喜びを感じられず、伝えたいという意欲も育まれない。

「言葉」はコミュニケーションの手段であり、人との関わりに大きく影響を与えるものであり、思考力や自我の確立など子どもの心と体の発達に欠かせないものである。特に、乳幼児期の母親や保育士の関わりが子どもの「言葉」の獲得に影響を与える。子どもが「言葉」獲得することは、単に喋れるようになるというだけでなく、人との関わりや思考力、自我の確立、他者理解など様々な発達上重要な力の獲得につながるのである。言葉で自分の考えや思いを伝え、言葉を理解することで友達の考えや思いに気付き共感したり、違いに気付いたりして仲間関係が生まれ協同的な活動を可能にする。

さらに、言葉を獲得することで論理的に考える思考力が育まれていく。子どもにとって「言葉」を獲得することの意味は、社会の中で生きていくために必要な能力を身につけるといふ大きな意味を持つものであると考えられる。

キーワード：言葉、言語、乳幼児、発達

I. はじめに

「言葉」を獲得する能力というものは、人間が生まれながらにもっている能力の一つである。そして、人間だけがもつコミュニケーション手段である。

人間は言葉を獲得することで、それと同時に「他の生きて行く上で必要な多くのものを獲得してきた」とも言えるであろう。特に、乳幼児期に「言葉」を獲得することが、子どもにとってどのような意味をもつのか考えることを、本研究の目的とする。

ここで、「赤ちゃん学」とは、ヒトのはじまりである赤ちゃんの運動・認知・感覚・言語および社会性の発達とその障害のメカニズムの解明から、ヒトの心の発達までを対象とする新しい学問分野であり、近年注目されつつある。

II. 言葉の発達と獲得

子どもにとって「言葉」を獲得することで、大きく発達を促進させることになる。それは単に言語発達という意味だけではない。それは、「言葉」を獲得する前、胎児期から既に始まっているといわれている。聴覚は、五感の中でも早く発達する器官であり、大体24週くらいで母体を通して母親の声を聞くという。そして、母親と他の人の声

を聞き分けることができるのである。当然、一番はっきりと聞き取れるのは母親の声であり、子どもに語りかける母親の声が、愛情に満ちた温かい語り掛けであることは母親自身の情緒の安定を表すものであり、胎児にとっても安らぎを与えるものであると考えられる。

子どもは生まれたときには「言語」をもたない。この時期の子どもは、泣くという方法でしか自分の思いを表現することができない。しかしながら、母親あるいは他の養育者は子どもの「泣き」を理解して、応答的に要求を満たしてくれるものである。単に要求を満たすだけ行動だけでなく「どうしたの?」「お腹が空いたのね」「気持ちいいね」などの応答性を持つ語り掛けというものがある。そのような母親からの応答的な語り掛けがあることが、子どもに自分の要求や欲求が伝わる嬉しさやわかってくれる人がいるという安心感を与え、情緒の安定につながるのである。こうして築かれる母親との愛着関係を基に、子どもに様々な言葉がインプット(input)されていく。

言葉にはならなくても、クレーンから始まる喃語に対しても応答的に言葉を返してくれる母親や父親、保育士がいることで子どもの「言葉」を育んでいくことができる。子どもが見ている物に「ワンワンだね」「ニャンニャンいるね」と言葉を添えることで子どもに「これは犬だよ」「これは猫だよ」という認識を育んでいく。子どもの仕草も「よいしょ、よいしょ」など言葉を添えたり、砂遊びで砂を落とすときにも「ジャー」などとオノマトペ的な言葉を添えたりするなどの応答的で敏感な応答が子どもの言葉を育てていき、確かな言葉の獲得に繋がっていくのである。

子どもにとって「言葉」は伝えたい人がいること、伝えたいことがあること、伝わることの喜びを感じられることができるから必要になるのだと考える。このような前言語期を経て、乳幼児期の子どもは「言葉」を獲得していくのである。

Ⅲ. 言葉の果たす役割について

ここで、『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育』では、「言葉」が果たす5つの役割として、以下の点を挙げて指摘している。

- ① 他者とのコミュニケーションを図る…欲求、要求、感情、考え、経験、知識を他者と共有できる。
- ② 物事を考える(思考)…物事を知ったり、考えたりできる。乳児が出会う言葉は将来に必要な学力、問題解決能力などの基礎になる。
- ③ 行動をコントロールする…言葉を獲得し、言葉の理解が深まると、人から言われなくても行動を制御できるようになる。
- ④ 自分を表現する(自己表現)…自分の思い、要求、個性、能力を周囲に表現する手段として利用できる。
- ⑤ 自我を育む…「私が私である」という自我の形成に中心的な役割を果たす。「私」の心の成長には、言葉による思考や表現が欠かせない。

の5つの視点が示されている。

つまり「言葉」を獲得することで子どもは大きく精神発達を遂げ、考えることで課題解決の方法を学ぶこともできるということである。言葉の獲得に必要な4つの土台からはじまるその発達と育み方、非認知能力が注目されるなかで基盤となる自己や社会性の発達、愛着について、そして学びにおける過程を保育の実践にあわせて具体的に書かれてある。

筆者が保育の現場にいて常に感じていることは、年齢が大きくなるにつれて「言葉」の役割はどんどんと多様化し、重要化していくということである。

2017年改定の『保育所保育指針』において、言葉の獲得に関する領域「言葉」には、「経験したことや考えた事などを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とあり、

(ア) ねらいとして

- ① 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ② 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③ 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

と示されている。

つまり、「言葉」を獲得することで子どもは大きく精神発達をし、考えることで課題解決の方法を学び、何よりも他者とのコミュニケーション力を高め、コミュニケーションができることで人と関わる力を育てていくのであり、言葉を獲得することで自己と他者を理解し、自己と他者との関係性の中で社会性も育まれる。

こうして考えると、人間にとって「言葉」を獲得することの意味は多岐にわたり、社会生活を営んでいくという「将来」や時間的展望を見通しても、たいへん重要であると言えるのではないだろうか。

「言葉」を獲得し始めたときは、まだ「言葉」に頼るだけで十分に自分の思いを伝えられず、表情、仕草や行動、声なども使って他者に伝えようとする。そして語彙が増え、言葉で伝えられることが増えてくると、コミュニケーション手段のメインは言葉になっていく。言葉は自分の思いを伝えるだけでなく、友達の思いを知るツールにもなっていく。そのため、子どもにとって言葉は話すことだけでなく、「聞く」力も必要になっていく。単に「聞く」だけでなく「言葉を理解する」言葉によって表現された思いを理解する力も当然に必要なようになってくる。友達とコミュニケーションを取りお互いの思いに気付き、折り合いをつけていくことは、幼児期において最も必要な能力である。

幼児期の終わりまでに育てたい10の姿にも「言葉による伝え合い」があげられており、「言葉による伝え合い」がなければ「協同性」を育てることは難しいと考えられるし、「道徳性や規範意識の芽生え」にも影響を及ぼすと考えられる。自己表現をするためには「言葉」が不可欠であるとも言えるし、「豊かな感性や表現」にも「言葉」は必要である。

子どもにとって「言葉」はとても重要なことは明白なのである。指摘される3つの「資質・能力」にも「言葉による表現、伝え合い」「他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ」「日常生活に必要な言葉の理解」など、多くの資質・能力にもつながるものであると考える。

幼児期に豊かな言葉に触れ、豊かな言葉で思いを伝えられるようになることは幼児期だけでなく、その後の豊かな人との関わりにつながると考えられる。テレビ、DVD、スマホなどから子どもに聞かせたくない言葉が溢れている現在だからこそ、前言語期から保育者として豊かで温かい言葉で子どもに関わることが何より求められるのではないだろうか。

IV. おわりに

子どもが「言葉」を獲得するまでには、たくさんの発達の過程やプロセスがある。その過程の中でも一番重要なのは、愛着関係や信頼関係という人と人の絆であると考えられる。この情緒的な絆がなければ、「言葉」を必要としない世界に子どもを閉じ込めてしまい、全ての発育・発達を奪ってしまう。また「言葉」をもつことが様々な力の発達に影響

響を及ぼすことを考えると、私たち保育者はおも「言葉」を大切にしないといけないと考える。

30年ほど前に、鈴木祥蔵先生の同和保育の研修を受けたときに、「言葉は人を傷つけるものではなく優しさを伝えるためのものである」という言葉がとても印象的であった。今でも頭と心に刻まれていて、保育者としての自分のベースの一つになっている。それほどに「言葉」の力は、大きいのである。

親子の間でも、子ども同士でも、胸が痛くなるような言葉が飛び交う場面に出会うことが近年多くなっている。こんな時代だからこそ、子どもには温かい言葉をたくさん聞かせてあげたいし、子ども同士でも優しい言葉が行き交うような保育現場を作っていくことが、何よりの我々保育者の役割であると考えられる。

V. まとめ

人間しかもたない「言葉」という能力は、言葉を獲得するまでの過程において、大きく影響を受ける。生まれた時から始まる言葉かけや、愛情のある応答的な関わりを基に、大人との愛着関係を築くことから言葉の発達は始まっていく。信頼できる愛着関係が築けなければ伝わる喜びを感じられず、伝えたいという意欲も育まれない。

このように「言葉」はコミュニケーションの手段であり、人との関わりに大きく影響を与えるものであり、思考力や自我の確立など子どもの心と体の発達に欠かせないものである。特に、乳幼児期の母親や保育士の関わりが子どもの「言葉」の獲得に影響を与える。

子どもが「言葉」獲得することは、単に喋れるようになるというだけでなく、人との関わりや思考力、自我の確立、他者理解など様々な発達上の重要な資質・能力の獲得につながるものである。言葉で自分の考えや思いを伝え、言葉を理解することで友達の考えや思いに気付き共感したり、違いに気付いたりして仲間関係が育まれ、協同的な活動を可能にする。

また、言葉を獲得することで論理的に考える思考力が育まれていく。子どもにとって「言葉」を獲得することの意味は、社会の中で生きていくために必要な能力を身につけるという大きな意味を持つものであると考えられる。

文献 (References)

- ・厚生労働省「保育所保育指針」2018, フレーベル館
- ・小椋たみ子・小山正・水野久美「乳幼児期の言葉の発達とその遅れ」2015, ミネルヴァ書房
- ・小椋たみ子・遠藤利彦・乙部貴幸「赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育：言葉・非認知的な心・学ぶ力」2019, 中央法規出版
- ・石上浩美・矢野正「保育と言葉」2013, 嵯峨野書院
- ・坂田純「言葉の獲得に関する神経生理学に基づく考察 (思考と言語)」2019, 電子情報通信学会技術研究報告：信学技報, 119(151), pp. 89-94
- ・大島光代「幼小接続期における音韻意識の獲得と幼児教育施設の言語環境について」2019, 教科開発学論集, 7, pp. 125-135
- ・柴田長生・大森弘子「幼児期後期における「言葉領域」の発達と、子どもの成長全般への関連について：よりよい保育実践の視座を得るために」2019, 臨床心理学部研究報告 (京都文教大学), 11, pp. 3-16
- ・小原愛子・荒居日和・岡田直美「乳幼児保育・教育におけるカリキュラム評価に関する研究：保育所保育指針の分析を中心に」2019, Journal of Inclusive Education (アジアヒューマンサービス学会), 6(0), pp. 1-9

- ・高尾淳子「子どもの言葉の発達を促す保育者のコミュニケーション能力の見える化：保育者養成課程学生による創作短編物語の談話分析を通じて」2018, 同朋福祉(同朋大学社会福祉学部), 25, pp. 127-147
- ・蛭田一美「言葉の獲得過程における乳児の行動の意味：Y男児の誕生から発語までのエピソード記録からの考察」2018, 聖園学園短期大学研究紀要, 48, pp. 23-34
- ・伊崎一夫「乳幼児期の言語発達と思考力の育成(1)：幼児教育の連続と発展」2018, 奈良学園大学紀要, 8, pp. 1-12
- ・塩崎美穂「言語獲得期の保育実践評価について：保育内容「言葉」に関する基礎的研究」2018, 日本福祉大学子ども発達学論集, 10, pp. 89-101